

しょう せん そう なん の ち ひ

ドイツ商船遭難之地碑



1873(明治6)年、ドイツ商船ロベルトソン号が台風に遭い、宮国の沖合に座礁し難破しました。宮国の人々は荒れ狂う波の中を救助し、34日間手厚くもてなし、帰国させました。皇帝ウイヘルムI世はこの救助に感激し、1876(明治9)年、軍艦を派遣して平良市親腰に謝恩碑を建立させました。その後、満60年にあたる1936(昭和11)年に、宮古郡教育会が外務省の協力を得て新たに遭難現場に遭難記念碑を建て、盛大な式典が行われました。

エドワード・ヘルツハイム船長の航海日記

タイピンサン(宮古)の人々の行動は勇氣と博愛の精神に満ちていた。私は感謝と敬愛の念を込めて37日間に及ぶタイピンサンのできごとを語りたい。この島には博愛の人々がいる。

1873年7月9日

台風に遭遇した。懸命の避難作業を行ったが、行方不明者2名、私を含めた大半の乗員が怪我をした。船もマストと舵を失い、漂流を余儀なくされている。

7月12日

丸一日漂流し、昨日座礁した。救命ボートで脱出を図るが挫折。絶望の夜、私は灯りと人影を見た。朝になり、潮の満ちるのを待って島人のカヌーが近づいて来た。浜には医師も待機し、手厚く保護された。私たちは助かった。

7月21日

10日が経った。親切な対応に心も落ち着き、怪我也徐々に良くなっている。言葉も少しは通じるようになった。暇に任せて机とイスを作った。島人は床で食事をするが、私たちは座って食べたい。

7月24日

船の搜索も終わり、幾つかの積み荷が残ったが、ほとんどが役に立たない。森で山鳩を見つけた。鉄砲を修理して猟に出る。お目付役の島人は迷惑そうだったが、黙認してくれる。6羽しとめた。

晴らしい夕食が待っている。

8月2日

3人の役人が来て、もうすぐ大きな船が来る。その船に乗って沖縄島に行くか、私たちが操船して中国に向かうか、決めて欲しいと。私たちは中国に向かうことにした。早速操船練習を始める。

8月10日

数日前、私は落馬で怪我をした。一日も早く出航したいが、怪我が治らないと許可が下りない。これも島人の親切心なのだろう。彼らと海岸に出かけ、記念に大きなヤシの木に名前を刻んだ。

8月17日

いよいよ出航の日が来た。船は私たちの注文に応じて改造された。昨夜遅くまで別れを惜しんだ人々が手を振る中、大海へ乗り出す。さようなら、タイピンサン。さようなら、博愛の人々。

1876年7月22日

帰国後、この事件をドイツ帝国に報告した。島人の勇氣ある行動、気高く私心なき博愛の精神が永遠に語り継がれることを、私は望んでいる。



スカプヤー御嶽



宮国元島にあるスカプヤー御嶽は、豊穰神の送り迎えを主とする「ソナフカ祭り」の根所として住民が尊崇する御嶽です。この御嶽には、白鳥と化して飛んできた瑠璃壺の伝説があり、旧暦9月の乙卯から未の3日間は牛馬も外へ出さずに祭りを行うことになっています。このあたりの海岸は、昔の貿易場の面影を残しており、宮国元島からは約500年前の中国・明代の青磁の破片などが出ています。



宮古の竜宮伝説

昔、荷川取村に湧川まさりやという漁師がいました。ある日、漁に出てエイを釣ると、そのエイがたちまち美しい女に変わりました。まさりやは一目惚れして夫婦の契りを結びますが、女は海へ戻って行ってしまいました。

2、3ヶ月たったある日、同じ場所で釣りをしていると、2、3歳の3人の子どもがどこからともなく現れ、「母の使いで父を龍宮に案内するために来ました」と言いました。まさりやは不審に思いましたが、子どもたちはまさりやの手を取って海に入ったかと思うと、たちまち金銀ちりばむ楼閣の中にいました。子どもたちの母は以前に契りを結んだ女に間違いなく、親しげな顔でまさりやを出迎え、三日三晩、酒や料理でもてなしました。別れ際、女は涙を流し、「これをいつまでも私の形見と思って下さい」と瑠璃色の壺を手渡しました。まさりやは一気に現実に戻された気持ちで家に帰ったのですが、龍宮での三日三晩はこの世では3年3ヶ月の月日が過ぎていました。瑠璃壺には神酒が入っており、呑んでも呑んでも尽きることなく口の

渴きを癒し、天の甘露のような美味しい酒でした。これを呑んだ者は無病息災で長生きしたため、まさりやは家宝として秘密にしていたのですが、やがて村中の噂となり、大勢の村人が壺を見ようと家に押しかけて来ました。まさりやはいつの間にか贅沢な生活に思い上がってわがままになっており、「この酒は朝晩とも同じ味で、もう呑み飽きた」と言いました。そのとたん、壺は白鳥と化して空に舞い上がり、東の宮国村のスカプヤ屋という家の庭木に留まり、姿を消してしまいました。

『御嶽由来記』より



平良市内の湧川まさりや御嶽

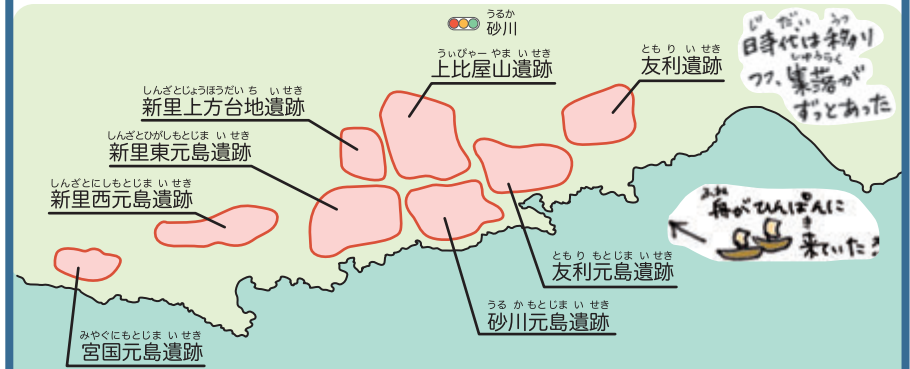
カーザ井



新里元島時代に掘られたと思われる古い井戸ですが、掘られた年は不明です。1771年の乾隆三十六年大波(明和の大津波)の後、新里元島が現在の位置に移ってから、専用の井戸として利用されました。1970年頃まで人々の生活を支え、貴重な水資源として重宝されましたが、上水道の普及に伴い、飲料水源として利用されなくなりました。



元島とさまざまな説



「倭寇」ってなあに?

「倭寇」とは、13~16世紀にかけて、朝鮮半島や中国大陸沿岸などで活動した、略奪行為や密貿易などを行った集団を指します。この倭寇の歴史は、大きく前期と後期に分けることができ、上比屋山遺跡と同時期頃の15世紀までの前期倭寇は、主に瀬戸内海・北九州を本拠地とした日本人が多かったと言われています。



しんざと ほうねんさい
新里の豊年祭



きゅうれき おこな ぎょうじ ししまい ほうふ
旧暦の6月のつちの日に行われる行事で、獅子舞、棒振り、
おんなおど だ な つなひ こうせい
女踊り(抱き踊りと投げ踊り)、および綱引きなどで構成されて
います。ほうねんさい きげん ふめい
豊年祭の起源については不明ですが、1771年のけんりゅう
さんじゅうろくねん おおなみ めい わ おおつなみ かいめつてき だげき うしゅう
三十六年大波(明和の大津波)によって壊滅的な打撃を受けた集
らく かいがんちか もとしま げんざい いち
落が、海岸近くにあった元島から現在の位置に集落を建て、ま
た、いらぶじま などからいじゅう
た、伊良部島などから移住してきた
ひとびと しんこう きづ さい こくほうじょう かんしゃ
人々が信仰を築く際、五穀豊穰を感謝
し、集落の発展を祈願して始めたとい
う説があります。



ツマグロゼミ *Nipponosemia terminalis*(MATSUMURA1913)



せなか いろ びみょう ちが
背中の色が微妙に違う
ぞうしよくし せつ
増殖施設

ちゅうごく たいわん やえやましょとう みやこしま ぶんぶ
ツマグロゼミは、中国、台湾、八重山諸島、宮古島に分布
し、宮古島を北限とします。宮古島では、さくわい ともりちく いち
部と、上野地区の一部にしかいません。ふつう、やしき う
屋敷に植えら
れるイスノキに生息していますが、せいそく しぜんりん ちか
自然林に近いアカギ、リュ
ウキュウガキ、クロヨナなどにも自然分布しています。羽の先
たんぶぶん ちい くら いろ もよう あたま した
端部分に小さな暗い色の模様があり、頭を下にしてとまる習性
があります。新里にあるツマグロゼミ増殖施設は、ツマグロゼ
ミをてんてき ぼご しぼうりつ たか ふか
天敵から保護し、死亡率が高い孵化まもない幼虫の生存率
をたか せつち
高め、増殖することを目的に設置されました。鉄筋構造で二
じゅう かなあみ は ないぶ
重の金網が張られ、内部はコンクリ
ートで4つに区切られ、どじょうびようがいちゅう
土壌病害虫など
がはっせい ひがい さいしやうげん おさ
が発生しても被害を最小限に抑えられ
るようにはいりよ
配慮されています。



う うに しゅう う たき
御船の親御嶽



『宮古島記事仕次(1748)』に、「野崎満さりや南の島より
逃れ帰りし事」と題する記事があります。船頭だった御船の
親は遭難した南の島アフラで殺されてしまいます。生き残った
船員が持ち帰った頭蓋骨は村人によってミャーカ(墓)に納め
られ、後に「御船の親御嶽」と呼ばれるようになりました。

アフラ島は、台湾の東の洋上に浮かぶ小さな「緑島(火烧島)」を指すとの
ことですが、緑島にこういった伝承などは無いといわれています。



う うに しゅう う たき ゆらい
御船の親御嶽の由来

昔、新里村に御船の親という船頭
がいました。ある日、琉球へ貢物を運
んだ帰りに嵐に遭い、「アフラ」とい
う南の島に流れ着きました。島の
人々は、御船の親や船員たちを捕ま
えて檻に入れ、「早く大きくなれ。早
く太れ。」と食事を与えました。実は、
アフラには人の肉を食べる風習があ
り、外国人が漂着すると、彼らを捕ま
えて食べていたのです。船員たちは、
殺されてしまうと覚悟していましたが、
ひとりだけ捕まらなかった者が
いました。それは、野崎真佐利という
若者でした。彼は、密かに島の女と親
しくなり結婚したので、捕らえられ

なかったのです。いよいよ自分が殺
されることを悟った御船の親は、野
崎真佐利を呼び出して、「お前が生き
て宮古へ帰れることがあれば、私の
頭蓋骨を故郷へ持ち帰り祀ってほし
い」と言い残し、数日後、御船の親は
アフラの人に殺されてしまいます。
野崎真佐利は御船の親との約束どお
り、彼の頭蓋骨を持ち出して小舟に
乗りアフラの島から逃げ出しました。
途中、アフラの島人がものすごい
早さで船をこぎ追いかけてきました
が、なんとか逃げ切り宮古へ帰り着
きました。そして、新里村の人々にこ
れまでのことを全て話し、御船の親
の遺言のとおり墓をつくり、祀りま
した。

う うに しゅう つま はなし
御船の親の妻ブナコイの話

御船の親にはブナコイという美し
い妻がいました。ブナコイは御船の
親がアフラ島で殺されてからという
もの、悲しみで食事も喉を通らず毎
日嘆いていました。これを見てかわ
いそうに思ったブナコイの両親は、
隣村の砂川戸佐と結婚させることに
しました。ところがブナコイは、砂
川戸佐と夫婦になっても、彼に隠れ
て御船の親を恋い慕い唄ってしまし

た。そのことを知った砂川戸佐は嫉
妬のあまり逆上し、ブナコイの髪を
掴んで散々に蹴ったので、ブナコイ
はそのまま息絶えてしまいました。
我に返った砂川戸佐は自分のしたこ
とを嘆き、ウナウワ坂の海の見渡せ
る場所にブナコイを葬りました。悲
しい運命にあったブナコイの魂は、
シギラ崎や海岸や野山をさまよい
人々に災いをもたらしたため、この
霊を鎮めるためにトゥイ御嶽に招
き、祀ったということです。

文化財の体系図

文化財の種類

特に価値の高いもの

特に重要なもの

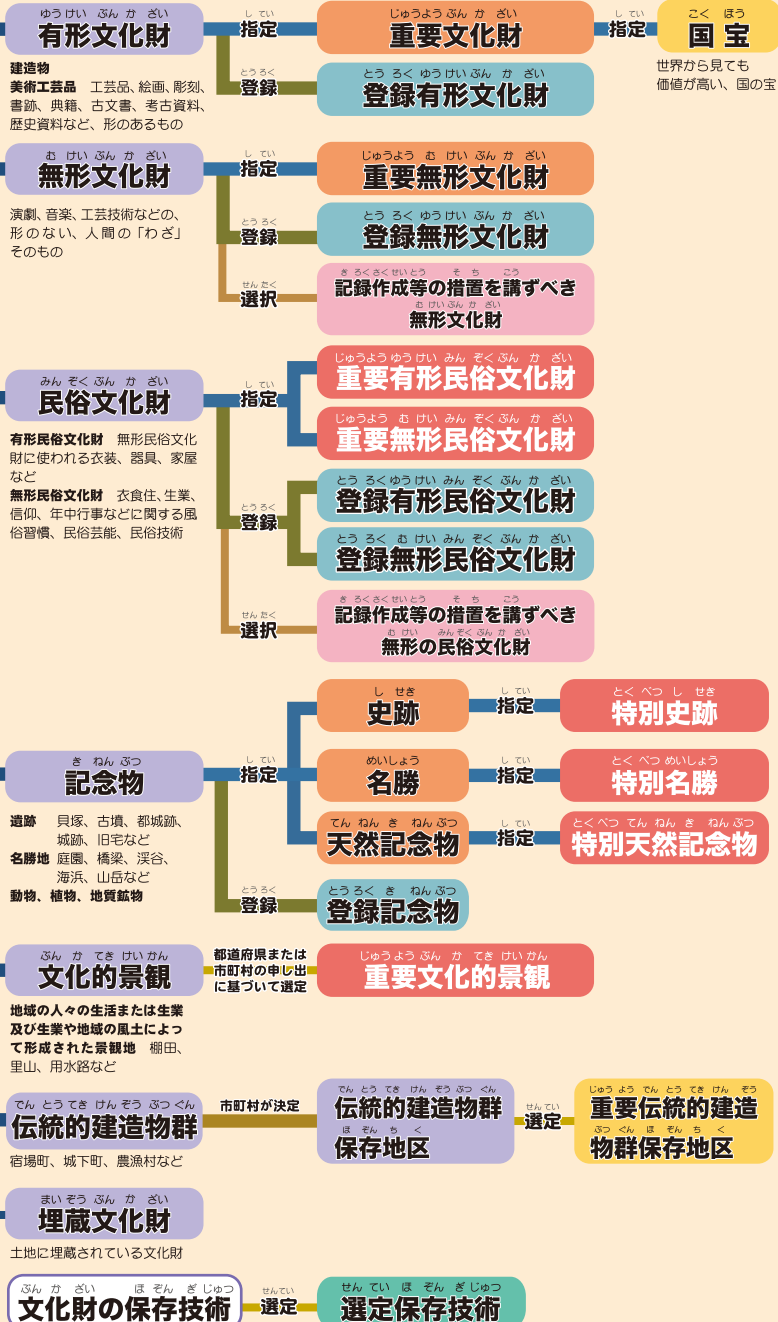
重要なもの

文化財

特に必要のあるもの

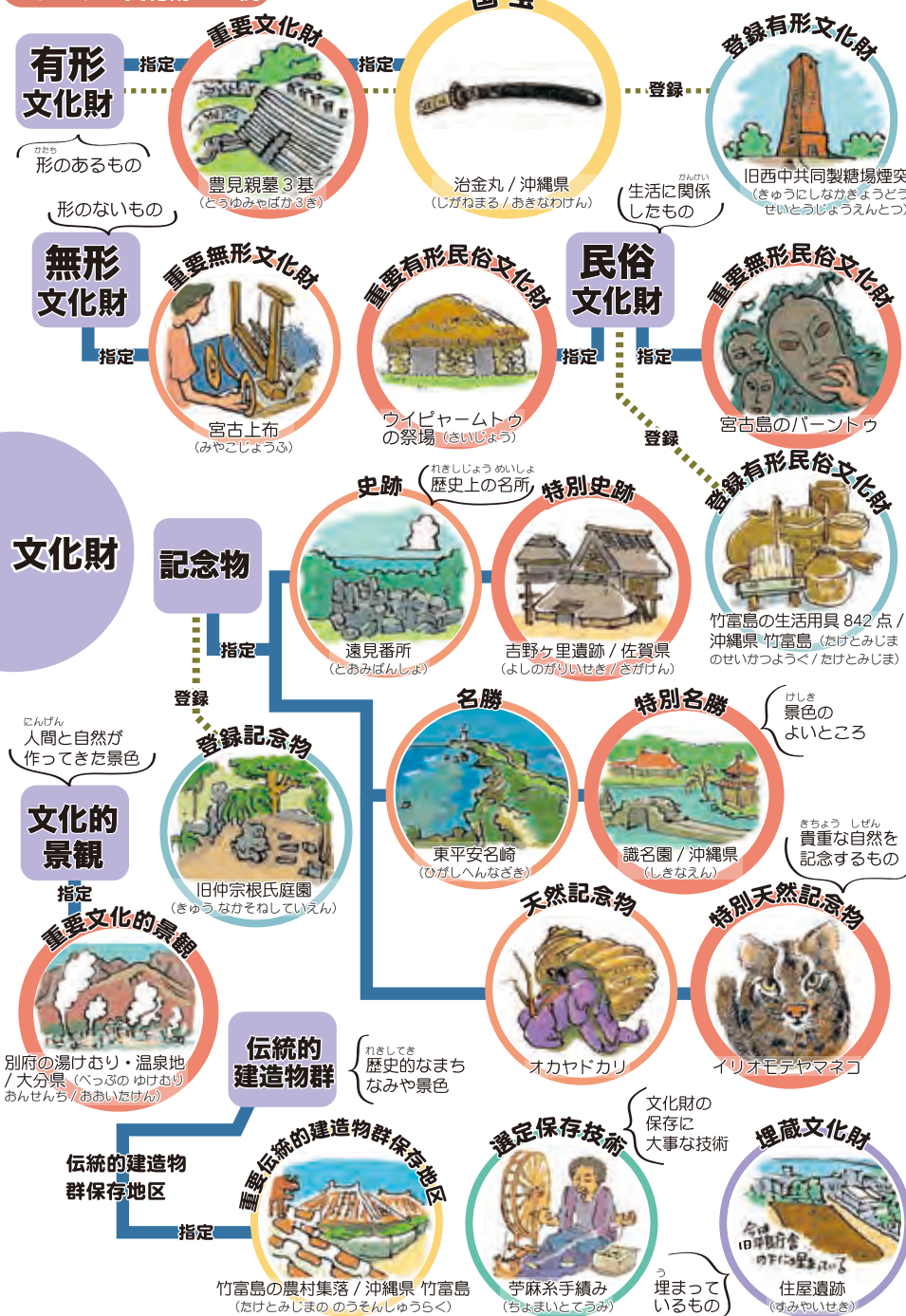
保存と活用が特に必要なもの

保存できるよ考えの必要のあるもの



それぞれの文化財の一例

※宮古島市や、沖縄県、九州にある文化財の一例



わたし ぶん か ざい
私たちの文化財です

たい せつ
大切にしましょう

ぶん か ざい きょ か む だん げんじょうへんこう
文化財を許可なく無断で現状変更する
ことは法律で禁止されています。



この冊子は非売品です (NOT FOR SALE)

宮古島市 neo 歴史文化ロード **綾道 (宮国・新里コース)**

発行 初版 2015(平成27)年 3月
改訂 2025(令和 7)年10月

編集・発行 宮古島市教育委員会
〒906-8501 沖縄県宮古島市平良字西里1140番地
TEL 0980-72-3764 FAX 0980-73-1976

イラスト・デザイン 山田 光